

**日本学術会議 基礎医学委員会 神経科学分科会(第25期・第4回)**  
**臨床医学委員会 脳とこころ分科会(第25期・第4回)**  
**議事録**

1, 開催日時 令和4年8月27日(日) 11:00~12:00

2, 開催場所 オンラインビデオ会議

3, 出席者

神経科学分科会 21名中19名

伊佐委員長、柚崎副委員長、渡部幹事、西田委員、川人委員、

渡辺委員、池田委員、入来委員、大隅委員、岡野委員、岡部委員、岡本委員、

上川内委員、合田委員、定藤委員、平井委員、上口委員、仲嶋委員、佐倉委員

欠席者 大木委員、見学委員

脳とこころ分科会 38名中 30名

高橋委員長、加藤副委員長、古屋敷幹事、林(朗)幹事、池田委員、池淵委員、

伊佐委員、岡部委員、尾崎委員、笠井委員、萱間委員、川人委員、齋藤委員、

坂田委員、高橋(英)委員、内匠委員、戸田委員、林(由)委員、藤井委員、

三品委員、水口委員、南委員、村井委員、吉田委員、渡辺委員、國井委員、

青木委員、内富委員、熊谷委員、山脇委員

欠席者 神尾委員、神庭委員、積山委員、坂内委員、寶金委員、松井委員、三島委員、

三村委員

4, 議題

**【報告事項】**

1, 前回議事録確認

2, 日本学術会議第185回総会について(資料4)

3, 第二部会(資料提示のみ)

4, 国際基礎科学年(IYBSSD 2022)連絡会議について(資料5)

5, 「神経科学領域における倫理的課題」に関する公開シンポジウム(資料6-1, 6-2)

**【審議事項】**

1, 「神経科学領域における倫理的課題」の見解表出にむけて(資料7)

2, 「未来の学術振興構想」の策定に向けた「学術の中長期研究戦略」の公募について(資料8)

3, ライフサイエンス委員会脳科学作業検討委員会での審議経過について

4, 来年以降の分科会の活動内容について(資料9)

## 議事

### 【報告事項】

#### 1, 前回議事録確認（伊佐委員長より）

#### 2, 日本学術会議総会について

令和4年8月10日に第185回日本学術会議総会が開催され、①会員任命問題、②研究インテグリティ論点整理、提言等の在り方、等が議論された。

#### ① 会員任命問題について（資4-2；渡辺委員、尾崎委員より）。

渡辺委員：前回の分科会の開かれた2月以降の概要として、梶田会長と松野官房長官との会談が行われた。政府としては「一連の25期の任命手続きは終了しており、6名の名簿の再提出は受け入れられない。今後は未来志向でこの問題を解決したい、」という対応であった。これを受けて、8月10日臨時総会を開催し会員より意見を求めたところ、25期の会員推薦において学術会議としての手続き上の瑕疵はなく、今後も6名の任命を求めていくべきであるとの意見が多く出された。一方、8月20日に開催された第二部の夏季部会において出席の会員全員に意見を求め、現状は膠着状態に陥っており、このままでは国民の学術会議への理解が得られないこと、26期からの正常化に向け梶田会長への一任も含め解決すべき等の意見が出された。

尾崎委員：広く意見を募ったため誤解もあり、26期から透明性を持って会員選考というのは現在の法律上は不可能である。日本学術会議は事前調整をしないのが原則であり、6名について事前調整するという意見とは相いれない。未来志向という曖昧模糊とした表現で膠着状態が招かれている。

戸田委員：第一部では原則論なので意見がはっきり出る一方、第二部では折れるところは折れようという現実論であり、はっきりした声が出難い面がある。

西田委員：第一部は絶対反対という立場ではなく、今のままでは原則と対立してしまう点を懸念している。夏に、政府から日本学術会議のありかたそのものに意見が出るはずであったが遅れており、今後学術会議がどうなるのかも不透明である。部間で意見が違うという形になるのは良くない。

坂田委員：日本学術会議には瑕疵が無いが、対立状態が続いても意味がないという点をどう折り合うかが課題である。

#### ② 研究インテグリティに関して（資料4-3；伊佐委員長より）

近年、研究のオープン化や国際化の進展に伴い、技術や情報の海外への流出が問題とされており、米英では「外国の影響」による先端技術の流出による国家の競争力低下を警戒する動きも出ている。その背景には、先端科学技術が持つ用途の多様性・両義性の問題、民生的研究と軍事的安全保障研究間の転用、すなわちデュアル・ユース問題がある。研究・学問の自律性確保と技術流出防止とのせめぎ

合いに、研究者コミュニティがどう対応すべきかが問われている。このような問題に対処するために「研究インテグリティ概念の拡張」が議論されている。研究インテグリティの確保は、研究機関、研究者、学協会等が主体的に考えるべき事柄ではあるが、専門的な知識やコストなど大きな負荷を伴うため、適切に役割分担し効率化を図る必要がある。

日本では、2017年に「軍事的安全保障研究に関する声明」が出された。2022年にいわゆる「経済安全保障推進法」が成立し、経済安全保障重要技術育成プログラムの具体化と特許の非公開化があげられている。産学連携なども含めて、AIや量子技術、サイバーや海洋技術などの研究プロジェクト公募が開始される予定である。

2022年7月には、政府からの諮問に応じて、日本学術会議から「先端科学技術と研究インテグリティの関係について」の答申において研究インテグリティ概念拡張の論点整理がなされ、ステークホルダーの役割分担と連携、研究現場からのリスク管理やガイドライン、支援体制の整備などが提唱された。

西田委員：神経科学分野ではたとえばBMIなど多くの技術が、軍事適用やデュアル・ユース問題に重なるように見えるが、政府は現状どのように捉えられているのか？機密性と研究の自由度のバランスをどの程度とるべきだろうか？

伊佐委員長：機会があるごとに、ワクチンなどのバイオ分野の重要性を問題提起しているが、政府側は現状ではAIと量子科学などで手一杯な様子である。機密性が非常に高いものは大学内で行うのは無理ではないかと思う。文科省やJSTが統括している研究費の範囲内では発表の自由は許容されるが、5年10年後にこれは使える、となってきた段階でどうなるかが問題だろう。

岡部委員：この問題は現在もう動いており、「経済安全保障重要技術育成プログラム」として既に20課題くらい挙がっているが、この項目立てで本当に大丈夫なのか？5000億円くらい投資することになっており、額も大きくバランスの問題から他の研究費が削られる可能性もあるので、デュアル・ユース問題だけではない課題と認識しておくべきではないだろうか？

伊佐委員長：ご指摘の通りで科研費の倍くらいあり、強く推している与党政治家もいておそらく今年度には公募が始まることから、喫緊の課題といえる。今回の資料には経済安全保障重要技術育成プログラムについての説明が含まれていないので、出せる範囲で後ほど委員に送ることにする。

### 3, IYBSSD 連絡会議について（資料5；古屋敷委員、池田委員より）

9月12日の連絡会議において、IYBSSD 参加委員会の関連する活動について情報交換を行う予定であり、所属委員会等における取り組み状況を紹介する。

古屋敷委員：本日 8 月 27 日にオンライン開催が予定されている「神経科学領域における倫理的課題」はも IYBSSD 関連イベントとして開催することから、本取り組みを紹介する予定である。

池田委員：アディクション分科会としても本日午後の公開シンポジウムを主催していることから、このシンポジウムの件と、IYBSSD2022 の学術フォーラムにも関わっていることから、そのような活動を含めて報告予定である。

4, 公開シンポジウム「神経科学領域の倫理的課題」について（資料 6-1, 2; 伊佐委員長より）

残念ながらオンライン開催となってしまったが、4つの分科会主催の公開シンポジウムとして本日午後開催予定である。

高橋委員長：昨日で登録を締め切り、700人を超える登録があった。当日参加者のために本日再度オープンしている。

【審議事項】

1, 「神経科学領域における倫理的課題」の見解表出にむけて（資料 7-1; 伊佐委員長より）

2022年8月24日に「学術会議神経倫理に関する見解に関する意見交換会」がオンラインで設けられ、佐倉委員、尾崎委員、高橋委員、伊佐委員長が参加した。公開シンポジウムと同様の構成で、脳イメージングやオルガノイドなどの基礎研究、再生医学、介入的な精神神経疾患治療、さらに社会との対話の在り方について分担執筆で見解を書き、公開シンポジウムで出た議論も取り入れる予定である。研究者の考えを表明するだけでなく、当事者とともに進めるというスタンスが重要。国民との双方向コミュニケーションというプロセスを経た意見表出のため、当初の予定よりも時間をかけ、次回は患者や当事者など多様な分野の意見を聞き、加筆して貰うステップが必要である。

岡野委員：シンポジウムでも紹介する新しい治療法は先端的技術を取り入れるので、どうしてもデコーディングなどを含む軍事技術とも深く関連する。社会全体との対話を含むオープンディスカッションが今後ますます必須である。

見解の表出について（資料 7-2; 伊佐委員長より）

見解については、委員会や部における査読を経て公表されることとなり、従来のように幹事会と総会を経ないことでスピーディーな対応が可能となっている。

2, 「未来の学術振興構想」の策定に向けた「学術の中長期研究戦略」の公募について

(資料 8; 伊佐委員長より)

日本学術会議では第 21 期以降、学術的意義の高い大型研究計画を広く網羅的に体系化する「マスタープラン」を期ごとに策定してきた。しかしながら社会環境の変化や日本学術会議の存在や役割について社会が注目する中、分野横断的研究、学際的取り組み、中長期的な視点のさらなる促進のため、マスタープランを廃し、新たに「未来の学術振興構想」を策定することとした。多様な分野や視点に基づく科学者コミュニティからのボトムアップを重視し、今後は 20~30 年の先を見通した学術研究の中長期的「グランドビジョン」を複数提示し、その実現に必要な「学術研究構想」を具体化してゆく。学術研究構想は「研究計画」または「施設計画」である。公募締切は 12 月 16 日であり、提出する予定がある場合には 10 月 21 日までに事前の情報提供が要求されている。「未来の学術振興構想」は複数の「グランドビジョン」+「グランドビジョン」ごとに複数の学術研究構想からなる。本分科会からはまだ特定に決まったものが無いので、今後どのように進めるか、学会連合と合わせるのか、あるいは学術会議として WG を作るのか、または各委員の発案にお任せするのか、議論をお願いしたい。

柚崎委員：たとえば生物科学連合では WG が立ち上がっていて、基礎系の学会中心に案を出す計画になっている。また、脳科連も何か出すだろうと思われる。本分科会でも WG を立ち上げた方がよいだろう。

高橋委員長：WG に賛成する。全く新しく WG を立ち上げなくても、各学会の将来構想委員会に依頼してもよいだろう。

岡部委員：第三者委員会で審査されるので、「脳科学と他の学問領域との比較」という見え方になる。ライフサイエンス委員会から出てくる構想と一致していることが肝要であり、あまりバラバラの見え方になってしまうのはむしろマイナスなので、無い方がよいかもしれない。

3, ライフサイエンス委員会脳科学作業検討委員会での審議経過について(伊佐委員長より)

脳科学委員会がなくなってライフサイエンス委員会の中に脳科学作業部会が吸収された。そこで、来年度をもって革新脳と国際脳が終わること、理化学研究所 CBS の今後の体制を含めて、今後の脳科学や理研に何を期待するかを作業検討委員会で議論している。委員長の加藤委員、革新脳 PS の岡部委員から意見を聞きたい。

加藤委員：当初は国際脳、革新脳から意見聴取して終わりになるリスクがあったが、ライフサイエンス課に丁寧な説明を行い、脳科連ができた経緯などを理解して頂き、今後の議論に脳科連からのインプットを入れる形にすることが出来ている。

伊佐委員長：脳科連では花川委員を代表とする将来構想委員会を中心に意見を集約中である。次回作業検討委員会が 11 月 2 日と決まったので、10 月までに総花的で

なくエッジの利いた提案を考案中である。

岡部委員：革新脳 PS としてこれまでライフサイエンス課と情報交換する過程で、今までの中核拠点がある体制はどうかという批判がある。これは誤解もあり反論すべき点もあるが、ライフ課には「脳科学が固定化されていて新しい研究者の参入が妨げられている」との印象がある。先ほどのコメントにも関連するが、何を変えて、何を残すか、委員会の先生方にはその辺を整理して理論武装してほしい。例えば新しくできた再生医学、老化、感覚器などは新しく見える一方で、脳科学や癌研究は歴史が長いので外から見ると新陳代謝が悪く見えてしまうのかもしれない。

岡野委員：再生医学と神経科学という新旧どちらの分野に身を置く立場としては、両者の事情は相当違うというのは当然だと思う。ただ、再生医学も京大の CiRA が無かったら発展しなかつたので、バランスが重要である。脳科学の特徴や事情を丁寧に説明してゆく必要がある。

#### 4, 今後の分科会活動計画について

今後の分科会の活動について、シンポジウムをどうするか議論したい。すぐには出ないかもしれないので、各学協会の方で今後課題とすべきものがあれば、次の分科会までに意見を頂きたい。

以上。